

A black and white close-up portrait of an elderly man with a full, grey beard and mustache. He is wearing thin-rimmed glasses and has a contemplative expression, looking slightly off-camera. His hair is grey and somewhat disheveled. He is wearing a dark, textured garment, possibly a jacket or sweater. The background is dark and out of focus.

ペドロ・メイヤー

転倒の記

ミラマー・コレクション

ミラマール・コレクション (COLECCIÓN MIRAMAR)

60年以上にわたるキャリアの中で、百万点を超える膨大なアーカイブを築き上げてきたペドロ・メイヤー。彼は今、進化し続ける自らの作品群に寄り添う多種多様な「物語」を分かち合うという、極めて重要な使命に取り組んでいます。

これらの物語は、単に彼自身の写真家としての眼差しを映し出すだけでなく、長年の活動を通じて築いてきた写真界やギルドにおける多大な貢献、そしてその歩みの本質を包括するものです。

「ミラマール・コレクション」は、1950年代から近年のAI技術の導入に至るまで、氏の写真表現の変遷を記録した41冊以上からなる回顧録的・自伝的な体系です。

『転倒の記』(CRÓNICA DE UNA CAÍDA)

『転倒の記』は、90歳を迎えた著者が自らの「脆さ」の記録者へと変貌を遂げた、一切の妥協を排した内省的な告白録である。テクノロジーが転倒を検知した瞬間から、手術室の生々しさ、そして歩みの遅いリハビリテーションに至るまで。本書は、身体、記憶、そして医療システムを、視覚的かつ思索的なナラティブの中に編み込んでいく。

著者は、カメラを手放すことはない。むしろカメラこそが、彼に寄り添い続ける。剥き出しの色彩を放つイメージと、モノクロームの瞑想的な図像の間で、彼は「観察者」としての倫理を再確認する。たとえ記録すべき対象が、自分自身の碎けた骨であったとしても。

自伝的な写真史の系譜に連なり、デジタル時代との対話を試みる本書は、「脆弱性」を「思想」へと昇華させる。そこにはスマートウォッチと外科医の手が共存し、幻覚はコードへと姿を変え、肉体的な痛みの確信が刻まれている。

これは単なる事故の記録ではない。自らの「破綻」を語り続けることができる限り、イメージは抵抗の証であり、生そのものであるという力強い宣言なのだ。

発行元 (Fondo editorial) ペドロ・メイヤー財団 (Fundación Pedro Meyer, A.C.)	執筆 (Textos por) ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer) フリオ・メイヤー (Julio Meyer)	© ペドロ・メイヤー、2026年 www.pedromeyer.com
コレクション・コーディネーション (Coordinación de la colección) マリソル・モリーナ (Marisol Molina)	文字校対 / Copy Editing テレサ・マルティネス (Teresa Martínez) フリオ・メイヤー (Julio Meyer)	著作権保護に関する通知： 本書の内容は、著作権者またはその相続人による事前の書面による許可なく、アナログまたはデジタルを問わず、いかなる形式や手段によっても、目的の如何にかかわらず転載・複製することを禁じます。
編集 / Editors ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer) ヒメナ・サンパヨ (Ximena Zampayo)	エディトリアル・ケア / 監修 (Cuidado editorial) パブロ・メイヤー (Pablo Meyer)	編集：メキシコ市、コヨアカン
画像ポストプロダクション (Posproducción de imágenes) ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer) アレクシス・オルティス (Alexis Ortiz) ヒメナ・サンパヨ (Ximena Zampayo)	印刷監修 (Cuidado de impresión) マヌエル・ガルシア (Manuel García)	印刷：メキシコ、オアハカ
	エディトリアル・デザイン (Diseño editorial) アレクシス・オルティス (Alexis Ortiz) カルロス・メンドーサ (Carlos Mendoza)	ミラマール・コレクション (Colección Miramar) ISBN: 978-607-29-7238-4
	制作助手 (Asistente de producción) パウリーナ・チャベス (Paulina Chávez)	『転倒の記』(Crónica de una caída) ISBN: 979-8-9953318-1-0

この人生を、より温かく、支えとなってくれたすべての人々へ。
(Kono jinsei o, yori atatakaku, sasae to natte kureta subete no hitobito e.)

「写真とは、私たちが分かち合う共通の言語である」——私は一貫してそう信じ続けてきました。

写真 (Fotografías)
撮影 (Photographs by):
フリオ・メイヤー (Julio Meyer)
フスティーノ・フェルナンデス (Justino Fernández)
ルベン・オマル・タフォヤ (Rubén Omar Tafoya)
ヒメナ・サンパヨ (Ximena Zampayo)
ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer)

『転倒の記』
ペドロ・メイヤー 著
(CRÓNICA DE UNA CAÍDA)
(POR PEDRO MEYER)

自宅の階段で転倒してから一年半。ようやくその怪我から快方に向かいつつあった矢先のことだった。あの時は、加齢黄斑変性による視覚の歪みのせいで、手すりを掴んだつもりがあらぬ空を掴んでいた。視界の急激な変容に抗えず、石造りの階段を背後から転げ落ちた。頭部に11針を縫う怪我を負ったものの、幸いにも骨折だけは免れた。午後5時という時間帯が悪く、頭からの出血にまみれたまま、誰にも気づかれず30分もの間そこに横たわっていた。

だが、今回は違った。朝の8時15分、トイレへ行こうと腰を上げた時のことだ。保険統計によれば、高齢者の転倒の9割は、ベッドからトイレまでのわずかな移動中に起きるという。床に倒れ伏すまで、統計のことなど微塵も頭になかった。その場に崩れ落ちた瞬間、腰に異変が起きたことを悟った。前回の事故とは異なり、血の海に沈むことはなく、助けもすぐにやってきた。Apple Watchが転倒を即座に検知し、保険代理店と息子たち、パブロとフリオに連絡を入れたのだ。私はまず何よりも先に、救急車を呼ぶよう頼んだ。

コヨアカンという街では、救急車はすぐそこにはいない。どれほどサイレンを鳴らそうとも、朝の渋滞を突き抜けることはできず、到着まで45分を要した。前回の経験とは裏腹に、やってきた救急隊員たちは、2階にいた私を文字通り「突き飛ばし、ぶつけながら」運び出し、車両へと押し込んだ。そして、予想通りというべきか、最悪の事態が起きた。ストレッチャーを固定するアンカーが故障し、救急車に固定できなかったのだ。

穴ぼこだらけの路面、段差、障害物。そんなメキシコ市の道を、砕けた腰を抱えて救急車で進むことほど、身体に堪えるものはない。しかし、それが現実だった。最初の車両の故障が解決せず、2台目の救急車を待つことさらに40分。路上でストレッチャーからストレッチャーへと移し替えられた。病院へ向かう道中、救急隊員は患者の処置よりも、息子や看護師に自分のサービスを売り込むことに余念がない様子だった。目元を照らす眩しいライトを消してくれと頼む私に、彼はパンフレットを配りながらこう言った。「書類を埋めなきゃいけないんでね」。どうやらこの場所では、事務作業は患者の命よりも重いらしい。

『自分を許すこと』

フリオ・メイヤー 著

(DARME PERMISO)

(POR JULIO MEYER)

私の幼い頃の記憶のいくつかは、ある「転倒」を軸に回っている。2000年代の初め、ガラパゴス諸島へのクルーズに出発する前、私たちはアンデスコンドルを見るためにエクアドルを旅していた。その巨大な猛禽類のもとへ辿り着くには、石が点在する浅い川を渡らねばならなかった。当時5、6歳だった私は、幼子特有の軽やかさで岩から岩へと跳ねていた。前方に飛び出した瞬間、私はペドロの足元に着地してしまった。彼は私を避けようとしてバランスを崩し、首に下げた3台のカメラを死守するために、岩の上へと正面から倒れ込んだ。その事故は、結果としてロサンゼルスへの緊急帰国便、そして数ヶ月に及ぶ手術と療養（腰椎を3箇所骨折していた）を強いることとなった。長年、私はすべてが自分のせいだと信じ込んでいた。あの瞬間だけは、今も水晶のように澄み渡っている。水、石、そして突如として反転した重力。その後に起きたことは曖昧だ。記憶というものは、ショックと罪悪感の重圧の下で、自らを編集してしまう。切り取り、ぼかし、誇張する。それは、もはや元のネガとは似ても似つかぬほど加工されたイメージのように。

それから歳月が流れ、私たちはまた何度かの転倒を経験した。今や私は岩の上を跳ね回る子供ではない。救急車や医師への連絡という初期の対応を終え、静かに佇む者だ。周囲に助けが溢れ、他の人々がペドロの腰を安定させるための緊急かつ即時的な手配に追われる中で、私は自分に差し出せる唯一のものが「注視すること」と気づいた。そして、私はペドロのカメラを手にとった。痛みで床にのたうち回る父にレンズを向けるのは、居心地が悪く、ほとんど不謹慎なことのようには思えた。その行為が、彼の苦しみを「見世物」に変えてしまうのではないかという危惧に囚われたからだ。

しかし、私は理解している。複雑な事象を探索すること、たとえそれが困難な時であっても——あるいは困難な時だからこそ——、それこそがペドロの仕事、思考、そして究極的には生き方の根幹であったことを。エクアドルでは、私は意図せず転倒の「原因」となった。そして今、私はその「目撃者」となった。この転倒を記録し探索することは、搾取ではない。むしろ、その瞬間を消し去ることを拒む意志なのだ。自分にシャッターを切る「許し」を与えた時、私はペドロが長年実践してきたことを理解し始めた。崩壊を直視することは、修復へと向かう一歩であること。そして時に、誰かを支える最も誠実な方法は、カメラを揺らがせずに構え続けることなのだと。

私は、ライカQ2モノクロームを携えて病院へ向かった。24mmの広角レンズが描き出す画角と、画面に触れるだけでシャッターを切れる操作性が気に入っている。

これまでの人生において、私は常に自分自身の冒険を記録するルポルタージュの作り手であり続けてきた。自らを犠牲者として描くのではなく、あくまで一人の人間としての視点から、その瞬間を見つめるために。

数々の検査とレントゲン撮影の結果、大腿骨頭の骨折と骨盤の損傷が判明し、即座の手術が不可欠となった。手術が始まったのは午後7時。それは4時間半にも及ぶ長丁場となった。

説明のつかない奇妙な偶然というものがある。長男のパブロも、その数週間前に自転車で転倒し、腓骨を骨折していたのだ。彼を執刀したフスティノ・フェルナンデス医師の治療が実に見事であったため、私の腰の修復も迷わず彼に委ねることにした。こうして父と息子は、期せずしてほぼ同時期に、骨折の治療を同じ医師から受けることになったのである。

さらに言えば、20年前にバングラデシュでアキレス腱を断裂した際、イギリスで購入した一足のギブス用ブーツがある。完璧な状態で保管されていたそのブーツを、今度は息子の回復のために貸し出すことになった。人生というものは、不運さえも再利用（リサイクル）して巡っていくものらしい。

『トランプの夜』

ペドロ・メイヤー 著

(NOCHE DE NAIPES)

(POR PEDRO MEYER)

術後、点滴による膨大な輸液量と、自力でトイレに立てない状況を鑑み、泌尿器科医はカテーテルの留置を決定した。正直に言えば、その処置には恐怖を抱いていたのだが、医師の手際は見事と言うほかなかった。「はい、終わりましたよ」という声がした時、私はいつ挿入されたのかさえ気づかなかったのだ。

しかし、その二晩後、幻覚が始まった。それは実にもっともらしい創造力に満ちたもので、当直の医療スタッフを私の精神状態への懸念で随分と困惑させたに違いない。

私の脳が作り上げた物語はこうだ。自分の尿道から、トランプの束が途切れることなく引き出されている。一枚一枚が数珠つなぎになり、果てしなく外へと流れ出てくるのだ。譫妄(せんもう)の最中にあっても、私の中の論理的な思考はこう反論していた。「そんなはずはない。物理的にトランプがそこを通るわけがないのだから」。その「通るはずがない」という確信と、目の前で「次々と出てくる」という鮮明なイメージが、どうして共存しうるのか。私は自問自答を繰り返した。

やがて、私は一つの安らかな結論に達した。今見ているものはすべて「デジタル」なのだ、と。もしこれが「0」と「1」で構成されたデジタル・データとしてのトランプならば、尿道の中を完璧に通り抜けることができる。そう理論づけると、私は安堵した。しばらくの間、私は何十枚もの仮想カードを引き出し続けながら、こう考えていた。「連中、私の体の中にデッキを一揃い置き忘れていったな」。外科医が患者の体内にハサミやガーゼを置き忘れるという怪談じみた話を思い出した。だが、私の頭の中ではそれはすべて「ソフトウェア」だったので、さほど心配はしていなかった。

だが、現実には悲劇的にも、仮想(バーチャル)などではなかった。後で知らされたことだが、挿入されていたカテーテルが体内で破損しており、その破片を手作業で摘出しなければならなかったのだ。その詳細を語るまでもあるまい……。デジタルなトランプとは違い、それは、紛れもなく痛みを伴う現実であった。

今回の経験において、誰の助けも借りずに自分一人の力だけで成し遂げたことといえば、ただ「転んだ」ことだけだった。それ以外はすべて、今日こうして皆さんの前でこの話を分かち合う機会を与えてくれた、数えきれないほど多くの人々のおかげである。わずか5秒間に起きた出来事に対処し、数ヶ月に及ぶリハビリテーションを乗り越えるために、これほどまでの調整と連携、そして統合が必要とされることに、私は深い感銘を覚えずにはいられない。

「手術の翌日には歩き出しますよ」と言われた時、私はそれが比喩的な表現だと思い込んでいた。左足をわずか10センチ動かすことさえ、当時の私には精一杯だったからだ。しかし、理学療法士のダニエル・リンコンは、現代医学の変遷についてこう説明してくれた。かつては絶対安静が推奨されていたが、それは二次的な副作用による高い死亡率を招いていたのだという。手術からわずか8日が経過した今、私はすでに10メートル近い距離を歩いている。

私が病院の明細書をここに公開するのは、一人の人間が回復を遂げるために必要とされる膨大な物資やリソースについて、改めて深く考えていただきたいという願いからである。私たちは「手術」と聞くと、つい病院や医師の存在だけを思い浮かべがちだが、その舞台裏で動き出す無数の器具、医薬品、そして煩雑な調整作業の規模にまで思いを馳せることは稀である。

今回の転倒を、単なる視覚的な記録としてだけでなく、ロジスティクスの詳細にまで踏み込んで見つめ直したとき、私は一人の個人を癒やすために必要とされる人間的、社会的なネットワークの複雑さに驚嘆せずにはいられなかった。本書を、この冒険を生き延びるために手を差し伸べてくれたすべての人々に捧げたい。

そして今、私はかつてないほど確信している。この決断の連続からなる深遠な世界を、人工知能 (AI) が代替することは不可能であると。もちろん、プロセスを効率化する助けにはなるだろう。しかし、この分野で職を失う人はほとんどいないはずだ。私たちが「脆弱」であり続ける限り、他者の転倒を癒やすためには、どこまでも「人間の手」が必要不可欠なのだから。

『プリンセス・レア』
ペドロ・メイヤー 著
(PRINCESA LEA)
(POR PEDRO MEYER)

人生は立ち止まることを知らない。たとえこちらが猶予を請うたとしても、無慈悲なほどの正確さで時を刻み続ける。2月21日の土曜日、17年間にわたる静かな忠誠の果てに、プリンセス・レアが息を引き取った。近年のAIが冷徹な効率性で弾き出すように、彼女の年齢を人間のカレンダーに換算するならば、それは95歳から100歳に相当するだろう。長く、濃密で、全き(まったく)一生であった。

後に残されたのは、彼女の写真だ。それ以上でも、それ以下でもない。そこには彼女の歩みのリズムや、まるでもとから自分の場所であったかのように家の中を占める独特の佇まいが刻まれている。彼女なりの理由があったのだろう、生涯を通じて、彼女が求婚者を受け入れることはついそなかった。彼女に見合う「貴公子」などどこにもいなかったのだ。ゆえに彼女は血のつながる子孫を残さなかった。代わりに残したのは、イメージである。そしてそのイメージこそが、今や彼女の「系譜」となった。

思えばデジタル時代の黎明期、私は多くの人々から、古びた父母や子供たちの写真を修復してほしいという依頼を受けていた。時が消し去ろうとした面影を、ピクセルという魔法で呼び戻そうとする人々。その時、私は写真が常に内包してきた二面性を明確に理解した。それは「記録」とすると同時に「遺物(レリック)」なのだ。私たちは写真を、過去の事実を証明する公正証書のように扱いながらも、同時に崇拜の対象とする。そのイメージを見つめることで、不在という現実と交渉できるかのように。

レアの写真は、彼女の存在を証明する法的な証拠ではない。むしろ、それは私たちが彼女を「忘れない」と決めた意思の表れである。どのイメージもこう断言している。彼女はここにいた。私たちと共に歩み、犬たちだけが心得ている尊厳と忍耐の混ざり合った眼差しで、私たちを見つめていたのだと。

結局のところ、生は流れ去る。しかし、写真という——この執拗な人間の発明品は——背後に留まり、驚くべき強情さで記憶を支え続ける。レアの呼吸は止まったが、私たちがファイルを開き、プリントを手にするたびに、彼女は再び姿を現す。誰かが彼女を見つめている限り、彼女の物語が閉じることはない。ただ、その形を変え、続いていくのである。

著者略歴 (Semblanzas de los autores)

ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer)

若き日より写真家を志したが、当時は正規の教育機関がなかったため、独学でその技術を習得した。彼のキャリアは、テクノロジーと視覚的ナラティブの境界を探求し続ける旅そのものである。「グルポ・アルテ・フォトグラフィコ」を設立し、第一回ラテンアメリカ写真コロキウムを推進。メキシコ写真評議会の創設にも尽力した。その後、世界初の写真専門ウェブサイト「ZoneZero」を開設し、1,500人以上の写真家の作品を世界に発信。世界初の写真CD-ROM『I Photograph to Remember (私は忘れないために写真を撮る)』を発表した先駆者でもある。回顧展『Herejías (異端)』は世界17カ国、60以上の美術館で開催された。また、ペドロ・メイヤー財団およびフォト・ムセオ・クアトロ・カミノスを設立。2020年からは、自身の60年にわたる画業を集大成し、変容し続ける時代におけるイメージ、記憶、そして生を考察する40冊以上の書籍シリーズ「Colección Miramar (ミラマール・コレクション)」の制作に邁進している。

ヒメナ・サンパヨ (Ximena Zampayo)

メキシコ国立自治大学 (UNAM) の美術デザイン学部にて視覚芸術を専攻。表現媒体として絶えず変容するイメージを探求する、新世代のビジュアル・クリエイターの一人である。その作品を通じて、共感的かつダイナミックな世界観を、刻々と変化する万華鏡のように描き出している。現在はペドロ・メイヤーのアシスタントを務めるとともに、「Colección Miramar」シリーズのいくつかの作品でエディター（編集者）としてその手腕を振るっている。

ミラマール・コレクション 既刊目録 (Otros títulos de la Colección Miramar)

- 『石油の陰で』 (A la sombra del petróleo)
- 『アルゴリズム』 (Algoritmos)
- 『自画像』 (Autorretratos)
- 『アバંダロ』 (Avándaro)
- 『コロニア・アジュスコ』 (Colonia Ajusco)
- 『キューバ 第I巻・第II巻』 (Cuba, tomos I y II)
- 『此岸から彼岸へ』 (Del aquí al más allá)
- 『1968年のさなかに』 (Durante el 68)
- 『普遍演劇』 (El Teatro Universal)
- 『私は忘れないために写真を撮る』 (Fotografía para recordar)
- 『ウエフトラ、そして他の村々』 (Huejutla y otros pueblos)
- 『イシュトリルコ・エル・グランデ』 (Ixtililco El Grande)
- 『ラ・ミシュテカ』 (La Mixteca)
- 『ラス・トルチャス:ラサロ・カルデナス市』 (Las Truchas, Ciudad Lázaro Cárdenas)
- 『アメリカの逆説:ユマ』 (Paradoja Americana - Yuma)
- 『サンディニスタの証言 第I巻・第II巻』 (Testimonios sandinistas, tomos I y II)
- 『エクアドル:ある一つの国 第I巻・第II巻』 (Un Ecuador, tomos I y II)
- 『ビルヒリオ』 (Virgilio)

現在、他23タイトルを制作中。(Y 23 más en proceso)

ミラマール・コレクションの各タイトルに関する詳細は、こちらのQRコードをスキャンしてご覧ください。

<https://pedromeyer.com/es/miramar/>

このコレクションの制作にあたり、多大なるご協力をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。



『著者付記』(Notas del autor)

ここで一つ、お伝えしておくべきことがあります。本作におけるいかなる誤脱も、すべては私自身の責任に帰するものです。私には過ちを完璧に防ぐための術がすべて備わっているわけではないことは、重々承知しております。しかし、これらの本を世に送り出したいという切なる願いは、失敗を恐れる気持ちを遥かに上回るものでした。読者の皆さまには、「完璧であること」と「なしうる最善を尽くすこと」の間に横たわる、この危うい均衡に免じて、寛容なご理解をいただけますと幸いです。

ペドロ・メイヤー財団 (Fundación Pedro Meyer, A.C.) は、著作権およびコピーライトの保護を推進しています。これらの権利は、創造性を刺激し、思想や知識の多様性を守り、表現の自由を促進し、豊かな文化を育むものです。

本書の正規版をご購入いただき、著作権法を遵守してくださることに深く感謝いたします。皆さまのご協力は、著者やクリエイターへの支援となり、当財団が今後も文化的な活動を継続していくための大きな力となります。

本書は2026年3月、メキシコ合衆国オアハカ州サンタ・マリア・デル・トゥレの
Repro.Gráfica, S.C. 工場にて印刷を完了した。

©『転倒の記』ペドロ・メイヤー 初版：2026年

本版は、クラシック・シリーズとしてナンバリングされた100部限定の刊行物である。

検印(コピー番号) | 第 _____ 番



PEDRO MEYER